

## **死で終わるものではない**

ヨハネの福音書 11 章 1-27 節

### **はじめに**

今日は、召天者記念礼拝です。私たちの教会の教会員で、先に天に召されて行った方々を覚えて、神様を礼拝します。始めに、この教会の関係者で召されて行った方々を紹介いたします。

**－召天者の紹介－(馬淵聡子姉、高橋英子姉、工藤忠道兄、矢澤勝美姉、矢澤昭一兄、玉山ヨシ子姉、坂井宏明兄)(山田朝子さん(未洗礼))**

さて、先ほど読んだ聖書箇所には、愛する兄弟を病気で亡くした「マルタ」という女性が出てきます。このマルタという女性には、「マリア」という姉妹と「ラザロ」という兄弟がいました。彼らはおそらく、両親を早くに亡くしていて、彼ら三人で力を合わせて生活していたのではないかと思います。しかしある時、兄弟のラザロが病気で死んでしまうのです。両親を早くに亡くした彼ら三人の関係は、非常に深い絆で結ばれていたと思います。しかし無情にも、そのうちの一人のラザロが病気で死んでしまうのです。遺されたマルタとマリアの悲しみも非常に深かったと思います。今日の聖書箇所には、その愛する兄弟を亡くしたマルタとイエス様の対話が書かれています。イエス様は、愛する兄弟を亡くした女性に、どんな言葉を語りかけられるのでしょうか。

### **1. 愛する兄弟を失ったマルタ**

マルタとマリアとラザロは、「ベタニア」という村に住んでいました。この村は、エルサレムから三キロほどしか離れていない村で、イエス様はエルサレムに行く時は、このベタニアのマルタたちの家に泊まっていたようです。イエス様とこの三人は、非常に親しい関係でした。5節にも、「**イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた**」と書いてある通りです。マルタは、イエス様が家に来る時は、喜んで迎えて、一生懸命にもてなしをする女性でした。

マルタは、イエス様に対してどのような信仰を持っていたのでしょうか。今日の聖書箇所から四つのことが分かります。一つは、彼女の信仰は、イエス様にゆだねる信仰でした。彼女は、ラザロが死ぬ直前、危篤状態の時に、イエス様がおられる所に使いを送って、「**主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気で**」と言いました。この時イエス様がおられた所は、ヨルダン川を渡った所で、ベタニアから約一日かかるところでした。マルタにしてみれば、イエス様にすぐに来て癒してほしい、そういう思いだったと思いますが、彼女はイエス様に「すぐに来てください」とか「癒してください」と言うのではなく、ただ「あなたが

愛しておられる者が病気です」とだけ伝えるのです。彼女は、愛するラザロのためには、イエス様は最善なことを成してくださると信じていたのです。ですから彼女は、イエス様にすべてを任せて、ゆだねたのです。

彼女が持っていた信仰の二つ目は、イエス様が祈れば、神様が必ず答えてくださるという信仰です。彼女は 21 節でこのように言います。「**主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになることを、私は今でも知っています**」。彼女は、イエス様の祈りに信頼していたのです。

彼女が持っていた信仰の三つ目は、24 節で「**終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています**」と言っている通り、終わりの日に人はよみがえるという信仰です。

彼女が持っていた信仰の四つ目は、27 節で、「**はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております**」と言っている通り、イエス様こそ神の子キリストであると信じる信仰です。

このようにマルタの信仰というのは、イエス様に信頼する素晴らしい信仰でした。彼女は、イエス様を愛し、イエス様のために奉仕する敬虔なクリスチャンでした。しかしそのような彼女に、愛する者の死という悲しい現実が襲いかかるのです。

## **2. ラザロの死を通して明らかになったこと**

イエス様は、御自分が愛する者が病気だと聞いても、すぐに駆けつけることはしませんでした。イエス様は、ラザロが病気だと聞いてもなお二日間、その場に留まられて、ベタニアに着いたのは、ラザロが死んでから四日も経っていた時でした。イエス様は、すぐに駆けつけて祈り、その病気を癒されることはなさらなかったのです。ある意味でイエス様は、御自分が愛する者が死ぬことを、よしとされたのです。

なぜでしょうか。なぜイエス様は、ラザロが死ぬことをよしとされたのでしょうか？なぜイエス様は、ラザロを癒されなかったのでしょうか？

イエス様は 4 節で、このように言われます。「**この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることとなります**」。イエス様は、ラザロの病気は「死で終わるものではない」と言われます。ラザロの死には、目的があるとされるのです。ラザロの死は、神様の深い計画の中であって、意味と目的があるとされるのです。

では、ラザロの死には、どんな意味や目的があるのでしょうか。ラザロの死を通して、明らかになったことが一つあります。それは、イエス様を信じる者は、永遠のいのちを持つということです。イエス様は、25-26 節でこのように言われます。「**わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか**」。

永遠のいのちとは、肉体の死を経験しないいのちではありません。私たちは誰でも、例外なく、必ず肉体の死を迎えます。たとえ、イエス様を信じる敬虔なクリスチャンであっても、

肉体の死から決して免れることはできません。

永遠のいのちとは、永遠にイエス様と共にいることのできるいのちであり、永遠に神様と共にいることのできるいのちです。聖書では、「いのち」とは神様と共にいることを意味し、「死」とは神様から離れていることを意味します。その意味で聖書は、神様に背を向けて、神様から離れている人を、「生きていても死んでいる人」と表現します。

永遠のいのちとは、永遠にイエス様と神様と共にいることのできるいのちです。逆に言えば、イエス様と神様と決して引き離されないいのちと言えます。イエス様は、ヨハネ 10：28-29 でこのように言われました。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません」。

永遠のいのちとは、平たく言えば、天国に行くいのちと言えます。天国とは、神様とイエス様がおられる所です。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」というのは、イエス様を信じる者は、死んだ後には、神様とイエス様がおられる天国に行くことができるという意味です。また「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない」というのは、イエス様を信じる者は、決して神様とイエス様から引き離されることはないという意味です。

永遠のいのちとは、私たちが肉体の死を経験した後に与えられるいのちではありません。「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない」とあるように、生きている時に与えられるいのちです。イエス様を信じた時から与えられるいのちです。イエス様を信じている人は、今すでに、永遠のいのちに生かされているのです。

私たちは今、イエス様を信じて神様との交わりに生かされています。この交わりが永遠に続くというのが永遠のいのちです。死を通して、決して切り離されない神様との交わりを、永遠のいのちと呼ぶのです。

私たちは、死を通して、愛する人と天国で再会するまで、しばしの別れを経験します。しかし、神様との交わりは決して断ち切られることはないのです。むしろ神様との交わりは、死を通してより豊かに満たされたものとなるのです。

イエス様を信じている人は、今すでに永遠のいのちに生かされています。新約聖書のⅠヨハネ 5：13 には、このようにあります。「**神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです**」。

私たちは、愛する人の死を経験する時、その人が天国に行った、神様とイエス様のもとに行った、永遠のいのちに生かされて行ったということほど、私たちを慰めるものではありません。また私たち自身が死を迎える時、私たち自身が天国に行く、神様とイエス様のもとに行く、永遠のいのちを持っているということほど、私たちを安らかにするものではありません。

## **おわりに**

ラザロの死は、マルタと私たちに、イエス様を信じる者には、死を超える希望、永遠のい

のちが与えられるということを明らかにしてくれるものでした。

人の死は、私たちに深い悲しみを与えますが、人の死には神様の深い計画の中であって、必ず意味と目的があるはずで、イエス様が、「死で終わるものではない」と言われた通りです。人の死は、私たちに死の現実を見つめさせます。私たちは普段の生活の中で、できるだけ死の現実を遠ざけようとしています。死と向き合うことを嫌います。しかし私たちは、この召天者記念礼拝を通して、もう一度、死の現実を見つめたいと思うのです。

私たちも、いつか必ず死を迎えます。そして私たちの愛する人々も、いつか必ず死を迎えます。私たちは今、死を超える希望を持っているのでしょうか。私たちに深い悲しみを与える死の現実の中でも、なおも慰めと安らぎを与えてくれるものを持っているのでしょうか。それらはすべて、イエス様のうちにあります。イエス様は今日も、私たちに語りかけておられます。「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか」。私たちがもし、マルタと一緒に、「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております」と答えるなら、私たちは確かに、死を超える希望、永遠のいのちを持っていると言えるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、生まれながらに罪を持ち、その罪のゆえに肉体の死を経験しなければなりません。しかしイエス様を信じる者にとって、肉体の死は裁きではなく、天国への入り口となりました。肉体の死の現実の前に、ただ絶望と悲しみしかなかった私たちに、希望と平安を与えてくださったことを感謝します。

私たちの教会から先に天に召されていった方々との確かな再会を信じ、待ち望ませてください。この祈りをた私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。